

ネットワーク資料保存 第117号 2017年12月

日本図書館協会
資料保存委員会

アメリカ議会図書館の修復事情

竹内真寿美

2017年8月4日(金)日本図書館協会研修室にて、資料保存委員会主催の資料保存セミナー「アメリカ議会図書館(LC)の修復事情」が開催された。36名の参加があり、参加者からも好評であった。

本稿は講師である竹内真寿美氏より、あらためて寄稿いただいたものである。なお、氏の略歴を以下に記す。

2001-2003 ランビエンテ修復芸術学院にて紙作品修復を学ぶ

2004 イタリア フィレンツェにある Istituto per l'arte e il restauro Palazzo spinelli に留学

2005-2006 ランビエンテ修復芸術学院にて助手として勤務

2007-2015 (株) Conservation for Identity にて勤務。書籍や紙資料の修復を手がける

2015-2016 米国議会図書館 conservation Division にてレジデント(研修生)として勤務

2016~ 独立

1. はじめに

筆者は2015年6月-2016年10月まで約1年半の間、アメリカ議会図書館(Library of Congress、以下LC)の資料保存部門の保存修復課でレジデントとして勤務する機会を得た。この部門は4つの課から成るが、一般コレクションを扱う製本・コレクションケア課と、特別コレクションを扱う保存修復課を中心にLCが資料保存にどのように取り組んでいるのか紹介する。

2. 資料保存部門(Preservation Directorate)

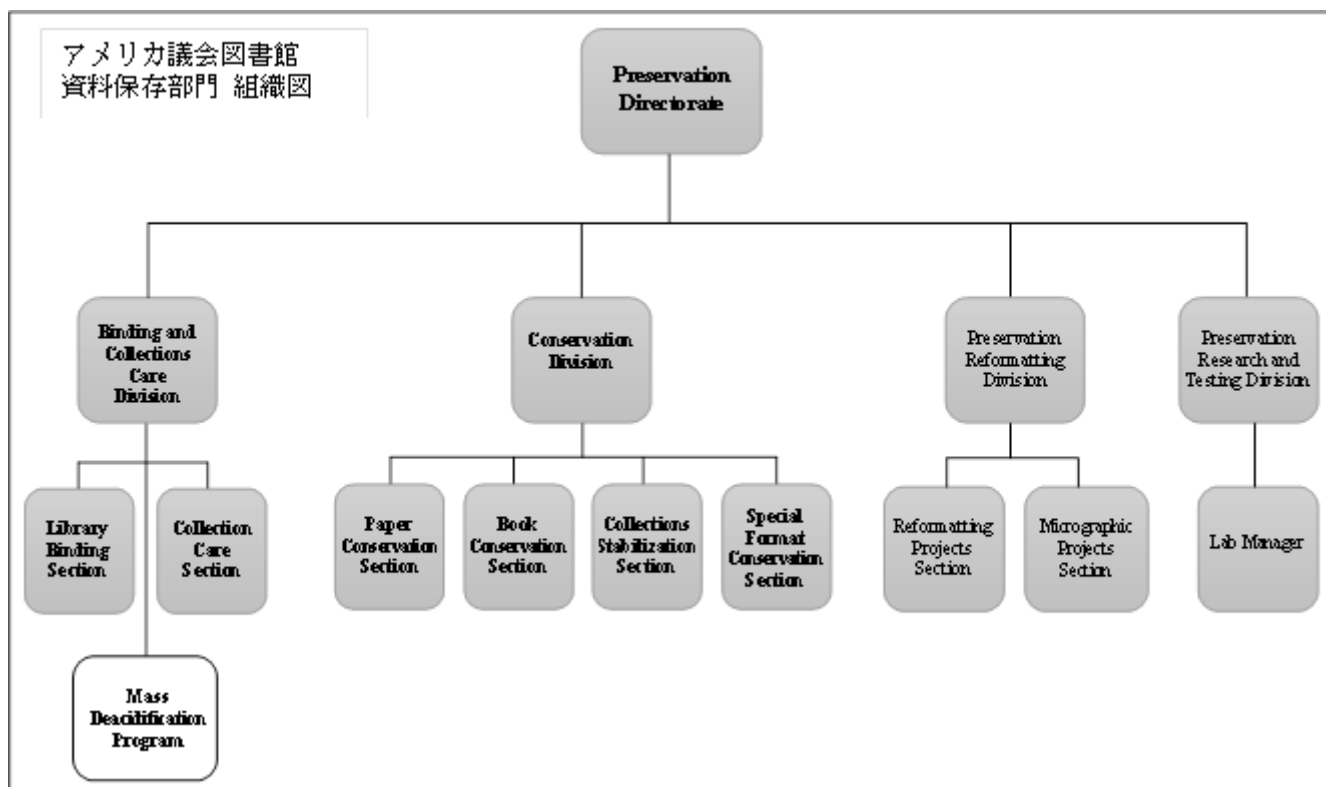
LCは世界最大規模のコレクションを所有しているが、それらはワシントンDC内の3館、郊外にある書庫や視聴覚資料保存センターなどに収蔵されている。この膨大な資料の保存の仕事を担っているのが資料保存部門である。すでに述べたように資料保存部門には4つの課があり、行っている業務は以下のとおりである。①と②の課の詳細は、項目を別にして述べる。

①製本・コレクションケア課(Binding and Collection Care Division、以下BCCD):一般コレクションの製本関連作業や修理、ハウジング(*1)、大量脱酸

②保存修復課(Conservation Division、以下CD):特別コレクションの修復、ハウジング、緊急時対応など

CONTENTS

アメリカ議会図書館の修復事情	竹内真寿美	1
<参加報告>資料保存委員会主催・映画フィルムの修復現場を訪ねて	阿久津智広	5
<資料紹介>「文化審議会著作権分科会報告書 平成29年4月」		6
<資料紹介>『文化財としてのガラス乾板』	新井浩文	7
資料保存委員会の動き		8



③資料代替化課（Preservation Reformatting

Division）：状態の悪い資料・貴重書などを、原資料へのアクセス数を減らすとともに、そのコンテンツは利用できるように、マイクロ化やデジタル化等の媒体変換を行う。資料の選定基準となるのは、資料の価値や劣化状態、利用頻度、モノとしての特徴等であるそのような基準をもとに代替化する資料が選定され、資料の特徴により適切なフォーマットに変換され、利用者に提供される。

④保存科学課（Preservation Research and Testing

Division）：資料保存のための科学的調査・研究を行う。例えば、保存環境・ハウジングに使用する包材等・伝統的材料の保存性・大量脱酸などの研究、資料を構成する素材（紙・インク等）の分析などが挙げられる。さらに、CD スタッフと協力して、ハウジングに使用する資材・容器などの仕様の作成、適切な展示・収納環境のコントロール等を行っている。

3. 製本・コレクションケア課

BCCD の対象資料は 1800 年以降出版された一般コレクションであり、2 つのセクション、図書館製本セクションとコレクション・ケア・セクションで資料保存のための作業が行われる。また、大量脱酸もこの課の下で行われている。ソフトカバー等の資料は外部の委託業者により図書館製本されるが、図書館製本セクションでは、製本前の準備、製本後の配架準備（資料のラベリング等）を行っている。すでに述べたように LC ではハウジング用包材・保存箱等の仕

様を細かく定めていて、その基準を満たしたものを購入している。資料に貼付されるバーコードや請求番号ラベル等も同様で、様々な市販のラベルの試験を行った上で、ラベルの基材や接着剤等の仕様を作成し、LC のウェブサイト上でも掲載している（*2）。

コレクション・ケア・セクションでは一般コレクションの修理、パンフレット製本等の簡易製本、ハウジングを大規模に行っている。このセクションでも AIC（American Institute for Conservation of Historic and Artistic Works：アメリカ文化財修復学会）の定めた倫理規範に沿って修復処置が行われているが、大量の資料を短期間に処置しなければならないために、より効率性とコストパフォーマンスの高さが求められる。CD が担当している特別コレクションの場合は、研究・修復作業のために数年間その資料を利用に供することができないことがあるが、一般コレクションではそのような期間を最小限にするようにして、マニュアルでも作業に要する時間（作業者が資料を持っている日数）が定められている。CD では比較的早い返却期限の場合でも大抵 1 カ月はあり、そのような状況に慣れていた私は、コレクション・ケア・セクションに見学に行ったときに 1 週間という返却期限の資料を見て、その違いに驚いた。

効率的に資料の作業を進めるために、様々な工夫が行われている。例えば、作業に使用する紙やクロスなどの材料をあらかじめ数種類の定型サイズに裁断して棚にストックしてあったり、ページの貼り戻し・背表紙の修理・本文と表紙

の接続といったような同じ処置、同じような色・サイズの資料はまとめて作業が進められるようにしたりしている。また、コレクション・ケア・セクションには修復処置マニュアルがあり、作業全体の流れや資料の種類・損傷状態に応じた作業の決定方法、実際の作業手順まで書かれている。効率性だけでなく、大量の資料を誰が処置しても（インターンやボランティアも含まれる）一定の結果が得られるように配慮されている。



作業が効率的に進行できるようにすべての材料を準備してある（*3）。

ハウジングのために、保存容器もこのセクションでは大量生産されている。資料を採寸して、適切な容器の形状を選べば、機械がボードを自動で裁断し、折り目もつけてくれるので、あとは折って組み立てるだけである。スタッフはローテーションが組まれていて、一定時間保存容器を作成することになっている。

LCでは予防保存対策の1つとしてプリザーベーション・テクノロジー社のブックキーパー法による大量脱酸を実施している。今年度（2017年度）の契約では冊子を約20万冊、シート状のものは約100万枚処理することになっている。LCの館内にはシート状の資料を脱酸処理できる施設があり、冊子の形態ではない手稿や地図、薄いパンフレット等の資料は館内にて専用脱酸装置かハンド・スプレーで処理が進められる。館内に施設があることで、他機関からの見学者に実際の脱酸処理の様子を見せながら、資料の延命を図る1つの手段として脱酸処置の実施を推奨している。

4. 保存修復課

CDの対象資料は特別コレクションであり、予防保存対策、傷んだ資料の処置、被災資料の対応等を行っている。予防保存対策としては、資料の保管環境のモニタリング（ワシントンDC内の3館だけでなく郊外の収蔵館を含む）、コレクションの調査、資料のハウジング、展示・代替化のための準備、利用者や館内スタッフの資料取り扱いガイダンス等がある。また、CDはインターンの受入れや国内外の会議への参加、研究成果・修復処置の発表、ワークショップ開催等の活動を通して、資料保存の分野全体に貢

献している。館内スタッフのスキルアップのためには、外部講師を招聘してCD全体向けのワークショップや、セクションの中でミニ・ワークショップ等を行っている。

CDは紙本、書籍、写真、安定化の4つのセクションに分かれていて、各セクションには10人前後（*4）のスタッフがいる。また、紙本、書籍、写真セクションでインターンを毎年それぞれ一人受け入れている。

- ・紙本セクション（Paper Conservation Section）：手稿、版画、水彩画、ポスターなどの一枚物の処置、マッティング・エンキャプシュレーションといったハウジング、調査等を行う。展示・貸出準備担当が2人いて、資料の簡易修理をコンサバターに振り分けたり、マッティングを施したりしている。最近はこのような展示等用の簡易修理の件数が増えているようである。
- ・書籍セクション（Book Conservation Section）：冊子等の修復処置、資料の媒体変換関連の作業（資料の査定・簡易修理・媒体変換後の本格修理）、特別貴重な資料用の布張りの保存容器作製等を行う。
- ・写真（Special Format Conservation Section）：写真、ネガ・ポジ、映画のフィルム等の処置、ハウジング等を行う。
- ・安定化セクション（Collection Stabilization Section）：資料のハウジング、環境のモニタリングやコントロール等の予防的保存のための作業を中心に行っている。ハウジングは、他の3つのセクションで処置が終了した資料の保存容器の製作、他の部門から直接持ち込まれた資料の適切なハウジング・リハウジング（古い収納の改善）などが含まれる。資料は、冊子やシート状のものからオスカー像や、舞台模型、フルートコレクションなど多岐に渡り、それぞれ適切な収納方法を考案し、ハウジングを行う。



書籍セクション

コンサバターは版画・写真、逐次刊行物、地図など所蔵部門にそれぞれ担当が割り当てられ

ていて、担当部門のキューレーターと修復やハウジングを行う資料の年間計画を立てる。実際に処置を行うことになった資料は、担当コンサバター以外にも振り分けられ、作業が進められる。この年間計画はフレキシブルで、優先順位にもよるが年度をまたぐことも少なくない。その他に代替化や展示用の簡易修理が年間を通じてあり、貴重資料や数の多い資料群などは、調査から処置まで数年かけて行うこともある。資料の処置に際してコレクション・ケア・セクションと大きく異なるのは、処置方針・技術の決定方法と時間のかけ方である。扱う資料が幅広いこともあるが、CDにはマニュアルや方針は特に存在せず、資料毎にコンサバターが処置についてキューレーターと提案・話し合いを行った上で決定する。1つの資料群を複数人で処置する際も、他の人の意見・処置方法を聞いて参考にする場合もあるが、同じ材料や技術を採用するかどうかはコンサバター次第である。補修紙の和紙・洋紙の選択、補彩の有無、使用する革等など、同じ資料群でも統一されているとは限らない。そこは筆者にとってはちょっとした驚きであった。ただ、コンサバターは担当部門のキューレーターをより理解し、話し合いも行っているので、処置の方向性等を他のコンサバターに伝えたりはしている。



独立宣言当時の逐次刊行物の修復

一方で、資料の代替化作業のための簡易修理はかなり効率性が求められる。LCでも代替化が近年では盛んに行われており、代替化関連作業には主に書籍セクションの4人（専任スタッフ3人）が携わっている。一連の流れの中で、スキニング等の作業に資料が耐えるかの事前調査、簡易修理、委託業者への資料の取り扱い方ガイダンス、代替化後の簡易・本格修理等を、資料を所蔵する部門・代替化スタッフと連携して行っている。代替化前の簡易修理は、基本的には作業に資料が耐えるようにすれば良いので、原資料の紙よりだいぶ薄い紙を補修紙として使用したり、小さな損傷は修理を行わなかったりと最低限の処置となる。また、効率的に作業を進めることができる Pre-coated tissue を

使用することが多い。Pre-coated tissue とは、予め接着剤が塗布されている和紙で、塗布された接着剤の種類に応じて熱（アイロン）やエタノールで接着剤を再活性化させて、修理箇所に接着させるものである。市販されているものを購入することもできるが、LCでは独自のレシピで作ったものを在庫していて、さらに必要な場合には紙の色や厚みを変えて各自で作製することもある。代替化のための簡易修理の場合、基本的な修理方針は共有される。

CDには緊急時対応チームというのがある。各セクションからボランティアで参加しているが、定期的集まって、マニュアルをもとに話し合いや訓練をしている。現在のシステムやマニュアルは、2005年のハリケーン・カトリナやLC館内で起きた被災（水漏れが多く、数年前の雪解け水による被害は大きかったらしい）などの経験が大きく寄与しているが、現在でも改善を続けている。館内で異常を発見したときは、発見者がLCの警察に連絡し、警察から緊急時対応チームに連絡が入る。休日や夜間でも緊急連絡網があるため、チームのスタッフが駆けつけられるようになってきている。また貴重資料はそれぞれ担当者が決まっていて、緊急時の判断を下すことができる。筆者の勤務中も何回か水漏れがあり、濡れた資料の対応を手伝ったことがあった。緊急連絡が入ると、スタッフ数人が現場を確認し、必要に応じて被災資料を緊急時用処置室に運び込み、マニュアルに沿って作業する。人数が必要な場合、CDスタッフ全員にメールで手伝いを要請すると、手の空いている者が駆けつけるといふ具合である。緊急時の対応方法についても、LCのサイト上で詳しく紹介している（*5）。

5. 終わりに

今回の経験では多くの資料保存の技術を学び、各スタッフの勉強熱心さにも刺激を受けた。さらにLCという大きな組織で大小様々なプロジェクトに関わることで、多くの人の考え方に触れることができた。一方、小規模な他の機関の修復施設や個人工房の見学を通して、各施設の能力に応じてそれぞれ資料保存に取り組んでいる様子を見ることもできた。どれも貴重な経験であり、より幅広い、多角的な視点で資料保存について考え直す機会となった。このような経験を活かして、今後資料保存の分野に微力ながら貢献していきたいと思う。

*1 保存箱やフォルダーの作成や、マッティングを行うことにより、資料を適切なシステムで収納すること。

*2 “Preservation Supply Specifications”

<<https://www.loc.gov/preservation/resources/specifications/>> (参照 2017/10/11)

*3 “Collections Care Section Treatment Manual-Introduction”

<<https://www.loc.gov/preservation/care/PDF/Intro.pdf>> (参照 2017/10/11)

*4 文中の人数は、2015年6月～2016年10月時点によるものである。

*5 “Emergency Management”

<<https://www.loc.gov/preservation/emergprep/>> (参照 2017/10/11)

(たけうち・ますみ 書籍・紙本修復家)

<参加報告>資料保存委員会主催・
映画フィルムの修復現場を訪ねて

阿久津智広

2017年5月29日、渋谷区初台にある株式会社東京光音（フィルム／ビデオ／サウンド／デジタル修復・復元センター）を訪問した（参加者6名）。

東京光音は、1948年に設立され、初めは地方の記録映画や県政映画の製作を行っていた。その後は、時代のメディアの変化に合わせて、報道フィルムの現像・編集、8mmフィルムの現像、フィルムのビデオ化（テレシネ）等を手がけてきた。映画フィルム等の修復業務を開始したのは1986年からで、その後は試行錯誤を繰り返し、現在のような映画フィルム等の修復・デジタル復元方法を確立させている。

今回はフィルムの修復・復元作業の現場を訪問し、それらの作業の流れの説明を受けた。映画フィルムの修復・復元作業の主な流れは以下のように行われている。

①クリーニング・補修

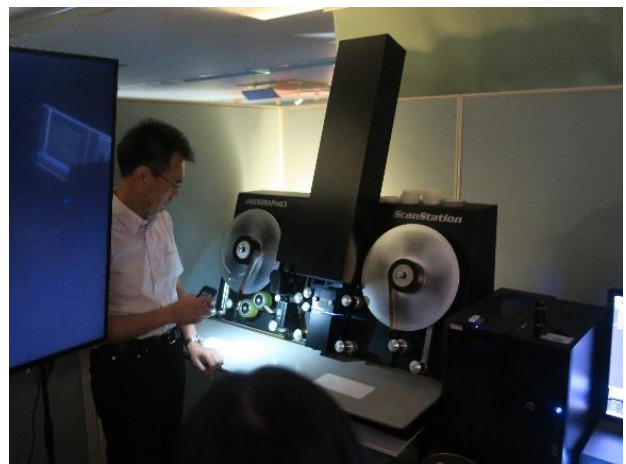
フィルムの状態によっても異なるが、まずは汚れ、糸くず、カビ等をガーゼ、ビロード等を使用し、手作業で除去していく。それとともに破損した部分や継ぎ目を専用のテープで補修する。次に、機械によるドライクリーニング、ウェットクリーニングで細かいゴミや汚れを除去する。これらの機材は主に自社で開発したものを使用している。

②テレシネ・フィルムスキャニング

テレシネとはフィルムをテレビジョン信号に変換し、ビデオ・DVDに収録する作業のことである。作業は専任のカラリストが色補正をしながら処理を行っていく。また、最近ではフィルムスキャニングによって、フィルムの色補正とデジタル化を行っている。それぞれの作業には特徴があるが、基本的には大きな違いはなく、現在テープレス化が進んでいるためテレシネ、フィルムスキャニングの両方の作業が並行する過渡期ということであった。



機械によるウェットクリーニング



フィルムスキャニング

③キズ・パラ消し

クリーニングで除去できないフィルムのキズ等のデジタルリストアを行う。この作業には、半自動型システムとマニュアル操作型システムがあり、それらを順次使用して行う。作品の種類や使用目的等により除去するレベルが異なり、とても神経を使う作業とのことであった。

その他にも各種テープをクリーニング、ダビングするための機材等を所有し、メンテナンスを行い、再生機器が身近になくなって困っているユーザーのために、旧式の録音テープ、ビデオテープの媒体変換等のさまざまなニーズに対応できる設備が整っていた。



各種テープをダビングするための機材

映画フィルム等の保存修復の情報は、まだまだ浸透していない。特に地方では都市部よりも情報が少なく、劣化した映画フィルム等をどのように処置して良いか分からず、内容不明なものがあり、廃棄してしまうこともある。そのような状況に対して、東京光音では地方へ積極的に情報発信を行っているということであった。また、人材の育成については、映画関係や音響関係の専門学校、大学等で説明会を行い、興味を持った学生に見学に来てもらい、現場を知ってもらってから採用試験等を実施する。そして、社内で基礎から教育するとのことであった。

普段多く取り扱っている紙資料の保存修復とは異なり、初めて拝見するものが多く、大変勉強になった。あらためて映画フィルム等のメディアをどのように保存していくかを考える良い機会となった。お忙しい中、丁寧に説明して下さいました東京光音の方々には心より御礼を申し上げます。

(あくつ ともひろ／国立公文書館)

資料紹介

WEB

『文化審議会著作権分科会報告書 平成29年4月』

●文化審議会著作権分科会

●URL:http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/chosakuken/pdf/h2904_shingi_hokokusho.pdf

この報告は、知的財産基本法や文化芸術振興基本法に基づき、「知的財産立国」や「文化芸術立国」の実現に向けた様々な施策を進めているなか、同分科会においても、急速なデジタル・ネットワーク社会の進展等に対応するため、著作権に関する様々な課題について検討したものです。実際の検討は、文化審議会著作権分科会内の法制・基本問題小委員会で行なわれましたが、その審議経過については、『図書館雑誌』2015年7月号に掲載された「著作物等のアーカイブ化促進を目指して」(星川明江／著)をご覧ください。

なかでも「第4章 著作物等のアーカイブの利活用促進」では、資料保存に関わってきます。特に著作権法第31条(図書館等の複製等)第1項第2号「図書館資料の保存のため必要がある場合」の解釈として、従来「例えば、欠損・汚損部分の補完、損傷しやすい古書・稀覯本の保存などの必要がある場合に複製を行うことがで

きるものとしているものである」と解されていたものが、「代替性のない貴重な所蔵資料や絶版等の理由により一般に入手することが困難な貴重な所蔵資料について、損傷等が始まる前の良好な状態で後世に当該資料の記録を継承するために複製すること」、つまり「現に損傷している資料の保存のみならず、今後劣化していく貴重な資料を可能な限り良好な状態で記録し保存しておく場合も含むものと解すべき」とされたことです。また、「記録技術・媒体の旧式化により作品の閲覧が事実上不可能となる場合に、新しい媒体への移替のために複製を行うことも可能である」との解釈にも注目したいところです。

(編集部)

『文化財としてのガラス乾板—写真が紡ぎなおす歴史像—』

- 久留島典子・高橋則英・山家浩樹編
- 勉誠出版
- 2017年3月 3,800円＋税
- ISBN : 978-4-585-22173-9



明治20年代から半世紀以上にわたって広く活用されてきた記録媒体に「ガラス乾板」がありますが、これまでその脆弱性や不理解から図書館等で保存されていても活用されずに放置されていたことが多かったのではないのでしょうか。本書は、そんな図書館現場の担当者にとってまさに目からウロコとなる本で、ガラス乾板を長年研究してきた東京大学史料編纂所スタッフが総力をもって編集しました。

全体の構成は、総論、第I部ガラス乾板の保全と活用、第II部ガラス乾板の情報化、第III部ガラス乾板蓄積の経緯とその背景から成り、各部にはコラムも付されているほか、附

はじめに

総論

ガラス乾板の歴史と保存の意義／写真と歴史学／写真史料を保存へ導くために

第1部 ガラス乾板の保全と活用

ガラス乾板の史料学／ガラス乾板の取り扱い／ガラス乾板用保存箱の製作／ガラス乾板の劣化例証

第2部 ガラス乾板の情報化

ガラス乾板のデジタル情報化

第3部 ガラス乾板蓄積の経緯とその背景

東京大学史料編纂所における歴史史料の複製とガラス乾板／博物館と文化財写真

附録

おわりに

掲載図・写真の所蔵・出典一覧／執筆者一覧

録として用語集や写真関連規格、参考文献、取扱業者一覧まで収録されていて、現場ですぐに役立つ内容もふんだんに盛り込まれています。

本書は、そのサブタイトルが「写真が紡ぎなおす歴史像」となっているように、これまで放置されがちだったガラス乾板に再び光を当て、歴史資料としての写真資料を再考する良書と言えましょう。是非ともご一読をお薦めしたい1冊です。

(新井浩文・埼玉県立公文書館)

資料保存委員会の動き

2017年5月定例会

日時：2017年5月17日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：7名（オブザーバー含む）

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」116号公開予定・115号以前の執筆者にWeb公開に関する著作権許諾の打診について／セミナー：米国議会図書館の修復事情、日時、広報役割決定／見学会：東京光音・参加者、日程等決定／図書館大会：「図書館雑誌」原稿の調整）

その他（HP：TTトレーディングのブログもんじょ箱の休止にともない、HPを改修、委員会で研修情報を掲載）

東京光音見学会

日時：2017年5月31日（月）

参加：参加者6名

2017年6月定例会

日時：2017年6月14日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：8名（オブザーバー含む）

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」116号公開予定、117号記事候補／見学会：東京光音報告／セミナー：米国議会図書館の修復事情・広報確認、その他の候補について／JHK共催シンポジウム：日程確認と理事長挨拶について／図書館大会：各演題、講師、タイムテーブル確認）

その他（資料保存関連イベント情報）

2017年7月定例会

日時：2017年7月19日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：5名（新委員含む）

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」：115号以前のWeb公開方法について、117号以降の

候補募集／HP：随時更新中／セミナー・見学会：候補募集中／JHK共催シンポジウム：動きなし）

協議事項（セミナー「アメリカ議会図書館（LC）の修復事情、準備、当日役割分担等確認、欠席者連絡事項／図書館大会：当日参加予定者、運営委員提出等について）

その他（新委員の紹介）

資料保存セミナー

「アメリカ議会図書館（LC）の修復事情」

日時：2017年8月4日（金）

場所：日本図書館協会研修室

講師：竹内真寿美氏（書籍・紙本修復家）

参加：36名

2017年8月定例会

日時：2017年8月23日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：8名（オブザーバー・新委員含む）

内容：

報告事項（「ネットワーク資料保存」：117号の記事内容／セミナー：「アメリカ議会図書館（LC）の修復事情」報告／

協議事項（見学会：候補施設と交渉者について、セミナーを含め、他にも募集中／図書館大会：準備、役割分担、当日配布資料およびタイムスケジュール／HP：ブログもんじょ箱に代わる情報の掲載について）

その他（JHK共催シンポジウム：理事長挨拶決定、当日役割分担／NDL資料保存フォーラムについて）

ネットワーク**資料保存** 第117号 2017年12月

編集・発行：日本図書館協会 資料保存委員会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03-3523-0816 FAX03-3523-0841
URL <http://www.jla.or.jp/committees/hozon/tabid/96/Default.aspx>
